

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3071500247		
法人名	有限会社 メディカルサービス有田		
事業所名(ユニット名)	グループホーム ゆりのき苑		
所在地	和歌山県有田市千田 403-1		
自己評価作成日	令和元年6月14日	評価結果市町村受理日	令和元年8月20日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/30/index.php?action_kouhyou_detail_2017_022_kami=true&ajgyosyoCd=3071500247-004&PrefCd=30&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 和歌山県社会福祉協議会
所在地	和歌山県和歌山市手平二丁目1-2
訪問調査日	令和元年7月9日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地域の行事に積極的に参加することで苑と近隣地域との関わりを深め、地域における苑の役割を持てるよう努めています。小学校の運動会や音楽会にも招待してもらい、秋祭りには子供獅子舞や太鼓などが賑やかに訪れてくれます。利用者さんは生活の中で喜怒哀楽はありますが、一人一人の思いを大切に、何でも話せてもらえる雰囲気、信頼関係を作り、望む暮らしを安全に楽しく送れるようにしていきたいと思っています。重度化に伴い、看取りを希望される家族さんも多く、都度、話し合いを行いながら、本人のその人らしさを尊重できる看取りができるよう努力しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は山や畑に囲まれ季節の移り変わりを直に感じることができる閑静な場所に建てられている。小学校行事の一環で認知症に関する理解・説明を積極的に行なっているためか、地元の小学生は事業所を自然に入出入りしている。また、「ゆりのき祭り」は年中行事で地域に向けた会として開かれている。職員は経験豊富で、法人理念もしっかりと浸透し「自由」「尊厳」「歓び」につながるケアの意識が徹底されている。災害対策についても市役所と連携を密にし対策を講じ、毎年消防署の立会いのもと入居者と共に避難訓練を実施している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項 目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらい 3. 家族の1/3くらい 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域の中で、家庭的な雰囲気の中、その人らしく暮らし続けていけるよう、「自由」「尊厳」「喜び」を盛り込んだ理念を作り、管理者と職員は、経営理念を念頭におき、共有を深め、サービスの向上に繋げている。	経験豊富な職員が多く法人理念がよく浸透している。日常業務中も常に法人理念を意識しながらケアが行なわれている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入し、カラオケ大会などの地域の行事に参加し、溝やゴミ置き場の掃除も行っている。小学校との交流会を行ったり、夏の「ゆりのき祭り」には毎年、多くの地域の方が参加してくれている。	回覧板がまわってくれば入所者と一緒に次の家に届けに行ったりし、地域との関係性を大切にしている。学校行事を通じ小学生も事業所に対して親近感が持っているようで登下校の途中に立ち寄るような関係性もできている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	高校の職場実習、中学校の職場体験を積極的に受け入れ、利用者が近所の方々と談話する事により、認知症の人を身近の感じてもらい、理解や支援の方法を伝えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進委員会はあまり開催できていないが、地区の代表者、利用者の家族、市職員の方々と情報交換は密に行っている。	運営推進会議は自治会役員や民生委員、家族や入居者自身も参加し内容を重視した会議となり、多くの意見交換がなされている。開催頻度は2ヶ月に1度には至っていない。	内容重視は素晴らしいことなので、2ヶ月に1回以上開催し、関係者の意見を事業所運営に数多く取り入れられること期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市町村担当者とは、電話、来苑、市役所を訪れる等、行き来する機会も多く、相談や意見の交換、助言を受けたりし、質の向上に努めている。	ケースワーカーの来訪の他に、ケアの状況に関して市町村との話し合いを随時行っている。最近では洪水対策等で市役所関係者との連絡調整の機会が増えている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員の正しい理解向上に努め、定期的に内部研修も行っている。昼間、玄関は開放し、自由に出入りできるようにしているが、さりげなく安全確保を行えるように心がけている。	事業所として外部講師を招き研修会を開催したり、外部研修出席者のレポート提出をもとにした伝達講習も随時開催されている。介護経験豊富な職員も多く、拘束しないケアが定着されている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員の正しい理解向上に努め、研修にも参加している。何気ない言葉や行為が見過ごされ、虐待となっていないか、自己確認し、職員同士も注意し合いながら、ケアをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護、成年後見人を利用している方がいるので、職員が内容を理解できるようにしている。定期的にくられる担当の方とも密に情報交換を行なっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書も見やすく、説明は丁寧に行い、質問・疑問点については、いつでも受け付け、その都度、納得できるように説明を行うようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族が来苑された時、又、電話をかけた時、何か、要望や不満、苦情がないか、尋ねるようにしている。何でも尋ねてもらいやすい雰囲気作りに努め、意見は運営にも反映させている。	意見箱等の設置はないものの、随時の電話報告や家族の来訪時にどの職員でも意見を聞き入れるように周知されている。言葉の行き違い等による伝達ミスがないよう注意している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	全職員が自身の意見を述べやすい環境を作り、意見や提案を収集し、反映している。	法人が運営する他事業所との会議やユニット会議を定期的で開催している。空調の不具合について職員から意見が出された時も直ぐに対応できている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	働きやすい環境・条件についてはスタッフの意見を基に話し合いを持ち、職場環境の充実、整備に努めている。資格取得に向けた支援もしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修への参加は順次行っており、内部研修も随時開催し、サービスの質の向上が図れるよう取り組んでいる。介護中も気になる事はお互いに話し合い、解決していくように努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	職員は外部研修等に参加する事により、他の事業所の職員と交流を図り、情報交換を行い、学ぶべき点を取り入れ、サービスの向上に繋げている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前のさりげない会話から、本人の意向やこれまでの生活を聞き取り、望む生活を探り出すとともに、信頼関係を構築し、アセスメントを作成し、サービスに導入している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前には必ず、ご家族と対面し、これまでの経緯や、求めているものを理解し、どのような対応ができるのか、事前にゆっくりと話し合い、不安を取り除き、信頼関係を構築するよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	なるべく早期に必要なとしているサービスを見極め、他のサービスも視野に入れた柔軟な対応ができるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の思いや不安、喜びなどを知る事に努め、人生の先輩であるという考えを持ち、支援する側、される側ではなく、共に過ごし、支え合える関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	月一回の『ゆりのき通信』にて、近況を報告し、連絡を取り合いながら、利用者様の様子や職員の思いを伝える事で、気づきの情報共有に努め、本人と一緒に支えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの場所に、散歩やドライブに出かけたり、昔からの友人や知人も来苑しやすい環境を作っている。本人の希望も日々、聞くようにしている。	散歩や買物での外出を少しでも多く入居者と行うようにしている。行きつけの美容室がある入居者に関しては職員が付き添ったりしている。外食も入居者の体調や気候に合わせて適宜行なっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係を把握し、トラブルになりそうな時は職員が間に立ち、さりげなく回避している。孤立する利用者がないよう、関係が円滑にいくように調整役となっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスが終了された方やその家族の方にも外で出会えば、来苑の声かけをしたり、近況を話したりしている。年賀状を送付したり、ゆりのき祭りへのお誘いもしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々、かかわっていく中で、今の思いや、希望を汲み取れるように努力している。意思疎通困難な方には、表情などからも汲み取り、把握できるよう努力している。	SOAP方式を活用することで、全職員に入居者のその時々状況が伝わり、きめ細かいケアにつなげられている。表記方法も簡単明瞭で評価も行ない易くなっている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	バックグラウンドシートに記入してもらったり、直接本人や、家族から語られる情報を参考にし、これまでの暮らしに近づけるようにしている。情報が薄い場合は本人の会話、行動により推測する努力もしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	SOAP方式の介護記録を取り入れ、一日の言動・行動等で、どの様な心身状況なのか、できる事、出来ない事をアセスメントし、把握するようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	スタッフだけでなく、本人様や家族の意見、その他の関係者(医師、看護師、PT)の意見を反映しながら、現状に即した介護計画であるのかを随時検討している。	3ヶ月に1度のペースで検討会を開催するが、開催日までに医師や看護師等の専門的な意見を聴取しておき、介護計画に反映させている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別にファイルを用意し、日々、ケース記録、バイタルチェック、食事摂取量、排泄等を記録すると共に、申し送りノート、気づきノートを活用する事で、職員間で情報を共有し、見直しに生かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人、家族の状況に応じて、いつでも外出、外泊、通院や送迎等、必要な支援は柔軟に対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	消防署には避難訓練への立ち会い、民生委員には運営推進会への参加等、各方面から支援を受けている。又、中学生の職場体験、高校生の実習も受け入れている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	希望する「かかりつけ医」があるなら、そこを受診してもらい、電話等でも連携をとっている。事業所で知りうる情報は、本人、家族の同意の下、全て医療機関に伝えるようにし、最善の医療を受けられるようにしている。	通院・往診時に医師に対し文書で生活状況を伝える工夫を行いつつ口頭でも医師に意見を求めている。かかりつけ医は入所前に本人・家族に聞き取り自由に選択できるよう支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週に一度、看護師が来苑し、利用者の身体状況を把握してもらい、疑問などあった時は相談し、電話でも対応できるようにしている。体調や些細な表情の変化を見逃さないよう、早期発見に取り組み、変化等があれば、適切な医療に繋げていく。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、サマリーを持参し、入院のダメージを極力減らすよう病院との連携をとっている。お見舞いをしたり、家族とも回復状況等の情報交換をし、苑内での対応可能な段階でなるべく早く退院できるようアプローチしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時には、重度化、終末期の対応がある事を説明している。今後の生活について意見交換を行い、どのような段階にきた時でも話し合いを持ち、本人にとって良い環境が選べるよう支援している。主治医、看護師、薬剤師等、多職種に終末期の対応ができるよう態勢を取っている。	家族から看取り希望があり、職員も納得し看取りケアを受け入れている。過去に看取り経験があり、看取りに関する指針も作成されており、研修も行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	応急手本マニュアルを作成し、職員の周知徹底を図り、慌てず対応できる様に努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練は年二回行い、うち一回は消防署の立ち会いの下で行っている。近隣の避難訓練にも参加し、施設固有のリスクとして河川氾濫対策を行い、避難先も定め、了解を得ている。	日中と夜間に分けられ訓練を実施している。入居者自身も訓練に参加し、消防署員の説明を聞くようにしている。地域の方の参加は難しいが協力関係は築けている。災害備蓄も備わっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	情報収集や外部との情報連携の際には、守秘義務について理解し、プライバシーの確保には最善の注意を払っている。一人ひとりの人格を尊重できるように、日常的な確認と改善に取り組んでいる。	正面玄関は解放しつつ、入居者が珠暖簾に触れることで外出が自然に確認できるようにし、居室に関しては内側から鍵がかけられ、ドアも刷りガラスでプライバシーに配慮しつつ異常の発見もできるように工夫されている。個別ファイルは外部からでも見えないよう、手の届かない部屋に保管されている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の思いを日々の表情や言動で察知し、本人が自ら決定でき、意欲低下にならず納得できるよう支援している。表出が困難な方でも、個々の能力に合わせ感情が表現できるように声かけを工夫している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	各々が満足できるよう工夫し、業務優先ではなく利用者中心のケアができるよう心がけ、本人の意思が選択できるようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の希望を聞きながら服を選んだり、身だしなみの乱れにはさりげなく声かけし、カバーしている。美容院に行ける方には同行し、困難な方には美容師さんに来苑してもらい、整髪を行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	出来る事を手伝ってもらったり、そばで準備をし、目で見て料理を感じてもらっている。食事は楽しみであると考え、食べたい物を言ってもらい献立に加える様にしている。旬の食材や行事に合わせて、季節感を味わえる様にしている。	巻き寿司等の調理は入居者が積極的に参加できている。味付け盛り付け等については入居者と職員が共に行なっている。また食後の食器等の片付けは入居者自ら自然に取組んでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	献立のバランスを配慮し、偏らないようにしている。量も各々に合わせて調整し、ミキサー食、きざみ食等、利用者の状態や体調に合わせて、対応し、必要に応じ、介護食を併用し、栄養・水分の確保に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	朝夕の口腔ケアは利用者の状態に合わせて、徹底して行っているが、昼食後は口腔ケアをする習慣のない人にはお茶を飲んでもらったりしている。夜間、義歯は洗浄剤に入れ、清潔を保っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を作成し、尿意曖昧な方には時間を見計らい声かけし、尿意のない方は定期的に確認を行っている。見守り、一部介助を行いながら、ズボン等の上げ下ろしや後始末を、できる範囲で行ってもらい、自立に繋げている。	個々の排泄リズムを把握しつつ仕草や尿臭等で、トイレの声かけを行っている。声かけの際も周囲に気づかれないよう細心の注意を払っている。ズボンの上げ下げ等もさりげなく必要時のみ介助している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便パターンを記録し、便秘気味の方にはなるべく、水分を摂ってもらい、繊維質の多い食材を提供するようにしている。医師との相談により薬も処方してもらっている。下着に付着があった場合はさりげなく声かけし、排便を促す様にしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	職員が一人になる夜勤帯以外はいつでも入浴できるようにし、本人の希望を聞いている。又、入浴している時間も本人の意思や様子を確認した上で、ゆったりとくつろぎの時間となるように配慮している。	入居者の希望に合わせて入浴の準備・介助を行っている。一番風呂のリクエスト等にも対応している。入浴剤も使用しながら季節湯も取り入れ、入浴が楽しめるような工夫を行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	午睡はされる方とされない方がいるが、疲れを感じているような時には横になる声かけをしている。夜間、眠れない方とは談話したり、暖かい飲み物などを提供し、リラックスできるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	各々の服薬ファイルを作成し、目的や副作用を職員が理解できるようにしている。お薬手帳もすぐにみられるようにし、変更があった場合は職員全員が周知し、状態を観察するようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活の中でそれぞれの役割を發揮して頂き、感謝の言葉を伝えることで生活への張り合いに繋げている。散歩、レクリエーション等で気分転換の支援をしている。飲酒が習慣になっている方にはそのまま、食事時、飲酒を続けてもらっている。		
49		一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	天気の良い日は散歩に出掛け、途中の風景を会話に盛り込みながら近所の方にも声をかけてもらっている。日々、買い物には、同行してもらい、ドライブや外食、喫茶店、遠出なども折に触れ行っている。	日々の散歩や買物の他に、花見等の行事も行い都合が合えば家族の参加もある。また、いついつ戸外に出るという形式的なものではなく、入居者の状況に合わせて外出の声かけが行なわれている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理ができる人には買い物時、自分で支払ってもらっている。困難な方には家族さんに了解を得た上、事業所で預かり、買い物時は代行し、支払っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	職員に声をかけてくれれば、いつでも電話ができる様にしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	七夕の笹飾りや、クリスマスツリー、ひな飾りなどをし、さりげなく季節感のある空間作りに努め、周囲を清潔し、五感刺激が不快になっていないか、気をくばっている。利用者同士が良好な関係で過ごせるよう工夫している。	七夕飾り等、季節を感じるができるような空間作りがなされている。照度も適度で周囲の山や畑も眺められる。テーブルには新聞折込や街に配布されているフリーペーパー等も自由に手にとれる。食事時の座席を変更することもあり、居心地の良さへの配慮も行っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食事のテーブルは一体的であるが、横の空間にはソファがあり、一人でテレビ鑑賞をしたり、他者と談話できる場所を設けてある。玄関先にはベンチも置き、外の景色を見つづけるようにしている。それぞれ、一日を思い思いの場所で過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	少しでも以前の暮らしに近づけられるよう、今まで使っていた家具を持参してもらったり、家族さんとも相談し、居室のレイアウトにあった椅子などを購入するなど、本人らしく、居心地よく暮らせるようにしている。	居室にクローゼットが備え付けられており、すっきり整理された空間である。自宅で使用していた家具等を持ち込むこともでき、動線も広くとり易い間取りである。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレや自室がわかる様に配慮したり、動線上には障害物を置かないようにし、安全に移動できるようにしている。残存機能を見極め、個々の自立した生活を支えられるよう日々考え、支援にあたるよう努めている。		